

特別講演

主催 埼玉医科大学病院 麻酔科, 後援 埼玉医科大学 卒後教育委員会
平成20年5月7日 於 埼玉医科大学 国際医療センター カンファレンスルーム 66

Acute Pain Management in Children

Duenpen Horatanaruang, M.D.

(Anesthesiology Division, Queen Sirikit National Institute of Child Health, Bangkok, Thailand)

近年注目されている小児の急性痛管理について、タイよりDuenpen Horatanaruang先生をお迎えして講演していただく機会を得た。本学麻酔科学講座では2007年11月より2名のタイ人留学生をお迎えし、研修教育を行っている。今回はその縁でHoratanaruang先生とレジデント麻酔科医2名が来学され、大学病院ならびに国際医療センターを視察された。Horatanaruang先生は小児麻酔科医としてタイにて御活躍されており、また、カナダでの小児麻酔に関する臨床修練の御経験もお持ちである。今回の来学にあたり、タイならびにカナダでの経験に基づく小児急性痛管理の実際について話していただくようお願いしたところ、御快諾いただき今回の講演を持つ機会を得た。

講演では、まず、ご自身が現在勤務されている小児病院の紹介があった。引き続き、小児の急性痛治療の必要性和意義について述べられた。小児の疼痛治療では、痛みの適切な評価が問題となる。講演の前半では、疼痛の評価法について年齢別に様々な方法を紹介されそれぞれの特徴について解説された。後半部分では、疼痛の管理の実際について種々の方法をあげて紹介された。本邦では使用できない薬物や小児の硬膜外鎮痛など本邦ではあまり普及していない方法についても言及され、興味深い講演となった。小児患者の様々な医学的な処置に対する鎮痛鎮静 (procedural sedation)

についても紹介されていた。時間的都合により、講演後の質疑応答の時間が十分とれなかったのは残念であった。

近年、手術後疼痛管理の重要性が指摘されている。不十分な術後鎮痛はアウトカムにも影響を与える可能性がある。小児患者でも例外ではない。小児患者では、その特殊性から伝統的に術後疼痛管理が不十分になりがちであった。特に言語で訴えることのできない幼少児に対しては、安全で有効な鎮痛薬が限られていることもあり、本邦の現状では必ずしも十分な鎮痛が行われているとはいえない。本邦では術後痛管理は外科系主治医、小児の場合には小児科医が主体となっている場合が多い。しかしながら、大侵襲の手術後のような強い疼痛に対しては区域麻酔や麻薬性鎮痛薬の使用といった特殊な方法が必要となり、安全で有効な疼痛管理のためには手術後にも麻酔科医の関与が欠かせない。こういった必要性から諸外国の小児病院では、小児麻酔科医によるacute pain serviceが24時間体制で疼痛管理を行っている。

今回の講演を拝聴して、小児の急性期痛管理について本邦の現状と世界的な水準に大きな差があることが再認識された。麻酔科医が小児の手術後痛管理に果たすべき役割は大きく、今後一層の努力が期待される。

(文責 蔵谷紀文)